

沖 繩 紀 行

関大探検部 近 藤 嘉 彦

海外の夢を呼ぶ探検部。その探検部が始めて試みた海外遠征が沖縄である。アメリカの行政下にある沖縄には、古来からの風習や風土病が未だ残されており、アメリカナイズ、或いは苗の空中散布的威力で、それも次第に消えつつあるようだ。今回われわれは資料の豊富な、しかも調査の進んでいる沖縄北部をはぶき、南部、即ち八重山諸島に眼を向け、調査の対象とした。八重山郡島には、秘密結社的な祭りを始め、素朴な素材が散在している。われわれは何でもあるがままに見て、われわれなりに素直に解釈したいと思つて出かけた。

幸い毎日新聞社の後援を得て、豊年祭を中心に風土病、風俗習慣などの生活調査をテーマに選んだ。隊も横田教授を隊長に、副隊長杉原助教授、渉外近藤、会計河本、記録藤田、装備米川とそれぞれ担当を決めた。しかし、結果的には石垣島到着後、隊を二分したので少数の隊員がなんでもやらねばならなかつた。

7月11日、多数の見送りを受けて、神戸を出港した。途中義宮さまの奄美大島視察の御用船とすれちがつて、船客が左舷に集まつたため、船が傾くなどのエピソードもあつたが、平穩のうちに那覇の泊港に着いた。暑い筈の日本を出て、南下するにしたがつて、一層暑さが倍加したように思われたのも、なまじ気の性ばかりではなかつた。

目もくらむような直射日光はわれわれの上からがんがん照りつけるのだつた。

ひめゆりの塔や健児の塔など、一連の沖縄激戦の物語はあまりにも有名だ。これについて語るのはわれわれの目的とするところではない。

7月18日、目的の石垣島に到着した。沖縄のように小さな島ばかりから

成っている国では、飛行機と船を交通機関とする。それも八重山郡島のように比較的開発の遅れている所ではもつぱら船だけに頼っている。石垣港からすぐ近くに望める小浜島や竹富島には、10トンぐらいの焼玉エンジンの小船だ。大きな波でもくれば、ひとたまりもないシロモノばかりである。勿論大型船にするには種々困難な条件が伴う。例えば珊瑚礁であるため浚渫が難しい。大型船の建造や港湾設備のため多くの資金を要する。

中央政府の頭を痛める問題ばかりだ。しかも生活のテンポが早くなっている今日、解決をせまられている。少し波が高いと欠航する島民の足は、特にわれわれのように少額の費用と限られた日程の旅行者には泣きどころである。

海運事務所に足繁く通つて、与那国島に渡るにはどうしても隊を二分する必要にせまられた。他の一隊は石垣島近辺の豊年祭を中心に取材することにして、杉原隊は19日白洋丸で与那国島に向つた。与那国島は石垣島と台湾の中間に位し、途中黒潮の本流を横切るため相当揺れた。多くの島民はなれたもので船酔いする前に泡盛を睡眠薬にしている。

昔は台湾との交易で栄えた与那国島も今はその面影もなく、豊かではあるが、静かな平和な生活を営んでいる。珊瑚礁であるにも拘らず、水の豊富なこの島は豊作物もかなりの生産を示し、目下砂糖工場の建設が進んでいる。静的な農産物本位の島にもやがて、第二次産業の動力の声が島中に響かんとしているのだ。その声はあくまでも青く、そして澄みきつた空と海の彼方に鳴り渡つてゆくことだろう。

7月の終りといえ、亜熱帯地方では農作物や果実の最盛期である。あちこちに見られる水田は稲の穂が低く頭をたれている箇所と、苗代や田植えをやつている田がある。二毛作のちょうど中間にあたるわけだ。甘蔗は人の背よりも高く伸び、ときおり海上から吹いてくるそよ風に快くなびいている。小高い傾斜地にはパイナップルがそこそこに熟している。そして畑のまわりにはソテツやアダンの木が何者をも入れない鉄状網のように茂っている。パイアの青い実がこの風景に、南国の情緒をかもし出すのに一層効果的に作用している。この景色を眺めるとき、一瞬暑さを忘れてしまう。そして誰が遠くこの島までやつてきたことを後悔するだろうか。

与那国島の東崎(アンアイサテ、アガリザキ)では馬や牛の放牧が行われ

ている。ソテツやアダンで自然の柵をめぐらし、最もすばらしい自然動物園をなしている。一面に草が覆い茂った牧場で、いつばいに太陽の光を受けて自由に駆け廻っている馬。もつばら本島のアメリカ人向け移出される肉牛。いかにも沖繩らしいものを感じさせてくれるようだ。豚は沖繩では最も重要な蛋白源だ。需要から言えば魚にその首位を譲るかもしれないが、カロリーや家庭での食品価値からみると、数段うわまわつているように思われる。大抵の家庭では数頭の豚を飼っている。島民が豚を大切にすることはいはれは半断できる。豚小屋はコンクリート製。人間はどうかといえば、木造でカヤぶきが殆んど。造り方は台風にならなくて、かなり頑丈にできている。屋根は竹の網を張りめぐらして飛ばされるのを防いでいるし、瓦屋根の場合でも、白い漆喰をぬつて補強している。フィリピン東方で発生する熱帯性低気圧は必ず数本は沖繩を訪問するからだ。否沖繩を通過して日本を訪れるのだ。台風による災害防止は沖繩最大の難問題となつている。家の周囲には石垣をはり、高い木を植えている。それに家を建てている土台が、道路より低くなつているのにも気がつく。あらゆる手段、涙ぐましい努力を台風対策にはらつているのだ。しかしやがて島の家々はコンクリートやブロック建築に変わつてゆくことだろう。

与那国島での漁業は近海をもつばら漁場としている。言葉を代えれば、漁場の中に与那国という島が存在しているといつた方が当を得ているようだ。黒潮に乗つた暖流魚が島に向つて泳いでくる。獲れる種類は豊富だ。名も知れない色とりどりの美しい魚が漁船から引き上げられる。大きいのはカジキ、マンビキ。小さいのはもう無数だ。しかしなんといつても多いのはカツヲだ。西の方にある久部良村には三つの大きなカツヲ工場がある。大きいといつても熟練を必要とする零細なものだから、アルバイトの主婦達が大部分を占める。男性の技術工はどここの工場も数人しかいない。一番熟練のいる技術はカツヲを蒸す火の温度調節で、その技術の修得には7、8年かかるとのことだ。このような状態だから、必然的にお値段もあがるというもの。

できあがつたカツヲブシは全部日本に輸出される。われわれ日常おめにかかつている製品のうち、沖繩産もずいぶんあることだろう。

沖繩で現在、最も脚光をあびている産業はパイナップル罐詰工業だ。戦争でめちやめちやにされたパイナップルを戦後少しづつ集めて、大量生産する

までの努力は並大抵のことではなかつた。三井物産など日本の資本で、各地にパイナップル工場が建設され、どんどん製品が作り出されている。昨年は工場設備が間に合わず、パイナップルを相当腐らせたとのことだが、今年は各工場とも設備も充実して、女工や原料を集めるのに大奮闘だ。現金収入の少なかつた島民には、工場で働くことは大きな魅力だ。石垣島の工場には、与那国島を始め、周囲の島から若い男女が大勢出稼ぎに行く。

沖縄のパン景気もまだ始まつたばかり。島民の間にはこの景気に疑問を持つ者も少くない。つまり贅沢品を栽培するなら、穀類を作ろうというわけだ。先覚者達の説得も無駄に終わることがたびたびある。

消費景気に湧く日本という大顧客をもつ沖縄のパン産業は、今後ますます伸展するであろうことは想像に難くない。

しかし、この産業にも残された問題は多い。世界的現象である人口の都市集中化によつて、11月の季節労働者を募集するのが難しい。また、他の外国製品に比べて品質が落ちる。一番大きな問題は協定によつて保護されている沖縄経済が、日本が為替の自由化を実施することによつて、諸外国の製品と同一の立場に置かれることだ。将来、沖縄は日本という最大の顧客を失うことになるかもしれないのだ。今、業者はハワイから良質の苗を取り入れて、品種改良に懸命だ。観光と飛躍的發展を遂げるであろうパイナップル産業とが、将来沖縄を支えることになるなら、今のうちに再考すべきではないだろうか。

沖縄の人々は南方の人に特有の人なつこさとあけつびろげのところを持っている。八重山までくると、素朴な人柄に胸をうたれる。われわれ旅行者にはとても親切にしてくれる。琉球料理に泡盛で——何処に行つても同じなんだが——もてなしてくれる。ところが調査には都合の悪いところはひた隠しに隠す。保守革新に分れ、相争つている者が、いざ、島の豊年祭となれば、外来者には全く冷い。石垣島に近い小浜島など、小船が保守派、革新派の二隻あり、島民は乗り分けているが、この島の豊年祭——赤マターは未だ日本には、その全貌が明らかにされていない程、島民の結束は堅い。祭の姿をカメラにおさめようものなら、島民からどのような仕打ちをされるかわからない。

つまり、何か秘密を知ろうという意志さえ持ち合さねば、八重山の人々は

純朴で、この上もなくすてきな人間なのである。

最近の面白い現象に創価学会の伝播がある。これ程強い宗教的結束も、創価学会の信者達を拘束することはできなかつたらしい。小浜島の赤マタもアメリカナイズばかりでなく、創価学会の侵透によつても、その特色を失い、伝統的行事が消えてゆくのを早めるかも知れないからだ。

豊年祭の調査にあつた横田隊は島民の排他的な防害に合つて、一部その貴重な調査をできなかつたところもあつた。学術的見地から非常におしまれるが、後日小浜島並びに石垣島の宮良部落の赤マタもその全貌を現わすであろうことを期待するばかりである。

きらぎらと照りつける灼熱の太陽の下で、一ヶ月にわたる八重山群島学術調査も終つた。近年とみに注目をあつめた西表島は、大規模な開発が予定されており、今回は種々の事情で渡島できなかつたが、調査範囲は八重山諸島全域に及んだ。

沖縄を理解するには、幾度か親しく訪れて研究すべきであるが、今後の課題としたい。沖縄には残された問題が山積している。今回のわれわれの調査が諸問題を解決するために少しでも役立てば幸いであると考えている。もちろん結論は急ぐべきではないが……………。

最後に、校友鉢嶺清馨氏、喜納 氏並びに安室雲月和尚には特にお世話になつた。隊員一同にかわつて謝意を表する次第である。

Peace

御 進 物

御 祝 い

山 に

フレッシュなタバコをいつも用意してお待ちしております。

阪急 千里山線
市役所前

カ ト ウ

タバコ店